

# 秀吉の御土居

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館

江口知秀  
Tomohide Esuchi

**夏**になると、温室のような暑さを味わいに京都へ行きたくなる。あわせて、貴船川の川床で涼みながらハモ料理などいただきたいが、たいてい大混雑して辟易するし、ここの料理は庶民の懐にひびく。どうしたものか、と考えていたら、同行者が洛北を流れる紙屋川でも川床料理が楽しめることを突きとめた。鷹峯の「しょうざんリゾート」という

らしく、値段も手ごろだ。しかも、京都行きにあわせて買った『京都魔界めぐり』という本には、すぐ近くに秀吉の御土居が残されていると書いてある。

このとおり、およそ取材とは無関係に行き先を決めても、たいてい建設関連の遺跡や碑に鉢合わせるから、そのたびに私たちは脈々と積み重ねられた建設活動の上で生きていることを、つくづく実感する。

地下鉄烏丸線の北大路駅から五分ほどバスに揺られると、土天井町の停留場についた。御土居跡はバス通りに沿ってすぐ近くにあり、フェンスが張り巡らされているので近寄ることはできないが、雑木が茂った土塁がこんもりと見てとれる。ここは御土居の北西のすみに位置している。

応仁元（一四六七）年に起こった応仁の乱以降、時代は戦国の世を迎え、平安京は戦乱にまきこまれて荒れ果てた。これを復興したのは戦国の覇者とな

った豊臣秀吉であり、聚楽第の建設、天皇や公家・武家・町人といった身分による住分けの実施、寺社を鴨川沿いに集中させて寺町をつくるなど、現在の町割りの礎を築いた。そして天正十九（一五九二）年、秀吉はこの新しい京都を土塁と堀ですっかり囲んでしまった。これが秀吉の「御土居」という。

御土居は土塁の外側に堀を併設した構造で、規模は場所によって異なるが、大正九（一九二〇）年の実測図によると、土塁の基底部が約二二メートル、高さ約五メートル。堀は幅が約一四メートル、深さが約四メートルとなり、土塁の上には竹が植えられていた。全長は、なんと約二二・五キロメートルもあり、東は鴨川、西は紙屋川、南は九条、北は鷹峯を限りとして市街地のみならず、広大な田畑も囲んでいた。

御土居の建設目的は、実はよくわかっていない。防衛施設にしては長すぎるし、治水や洛中の境界という役割はあるものの、それにしても少し大袈裟に過ぎる。天皇の牢獄などという珍説もでるぐらい、なかなか主たる目的が見えてこない。

そのような中で大阪市立大学大学院教授の仁木宏氏が唱えた「秀吉だけが京都全体を守り『平和』をもたらしうることを喧伝する装置」という説は、派手好みの秀吉の性格をよくとらえていて面白い。な

るほど、そう考えれば二二・五キロメートルの全長も、「俺ならこの広さでも守れる」という大風呂敷だと考えられるし、治水も都市境界も一手に引き受ける多目的構造物を築いたことも納得がいく。そうした御土居だが、明治になると破壊が進み、かつての京都の都市景観を伝える貴重な遺跡も、今では史蹟に指定された九箇所のほか、わずかに残るのみとなっている。



鷹峯上ノ町の御土居跡

[交通]地下鉄烏丸線の北大路駅から市バス北1系統で「土天井町」下車徒歩1分

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。